【ねがいましては】

平成２１年1月２６日　　*KYOWA SCHOOL*
第２１９号

「弱さを知る」

　昨年、世界の王監督が現役を引退されました。がんを患い手術され、復帰されたときの、あのやせ細った姿には寂しさを覚えました。その王監督の若き栄光の時代の逸話を、ある日のＴＶで見ました。

　ホームランを打ったとき、全身で喜びを表しながらベースをまわる王選手に、兄は叱ったといいます。

「打たれた者の気持ちを思え・・・。」

　その日以来、王監督はダイヤモンドをまわる際、謙虚な表情になったといいます。そこには家族の力があります。家族だから言えた一言だったのでしょう。誰からも慕われる、誰からも尊敬される人柄は、お兄さんがいらっしゃったからなのでしょう。

　ホークスの選手たちが口々にこぼしていた言葉・・・「王監督を胴上げしたいんです。」

　おそらく選手たちは「ひと」としての王監督にしびれていたのではないでしょうか。「あの人に近づきたい・・。」

　子どもたちは毎日のように戦場へと出かけていきます。学校を『戦場』と捉えている子は多いと思われます。

　いつ怪我をするかわからない場所だからです。怪我・・・心の怪我です。

　厚生労働省の言う、家庭内における児童虐待の定義の中、特に心理的虐待の欄にはこのように書いてあります。

１．心を傷つけるようなことを繰り返し言う
２．無視する
３．まわりと差別的な扱いをする・・・・・

　これは家庭内での心理的虐待として掲げられているものなのですが、もちろん学校現場でも自然にあてはまってしまう内容ではないでしょうか。これを学校では『いじめ』と呼んでいると思います。

　毎日が勝つか負けるかの世界に放り込まれた彼らは、冷静さを失い、やがて自らが加害者になってしまうことも珍しくはないと思います。集団心理の怖さです。

　まだまだ未発達のこころを持った子どもたちに、どのように接するべきなのか。ビクビクオロオロしている場合ではないはずです。家庭内では親が、学校では教師が、そしてここでは栗田が、誰がどう考えても、『良いことは良い悪いことは悪い』を伝えていかなければと思います。

　子どもたちは敏感です。先に掲げました３つの虐待のどれかひとつでも我が身に降りかかれば、こころはどん底へと落ちていきます。平静を装っていられるほうがおかしいのです。が、優しい子ほど我慢をします。
耐えて耐えて耐え抜いた子は、やがて瞳に憂いを灯し始めます。灯し始めるきっかけとなったのは、誰でもない、ひとのこころの温かさを知ったからです。家族の、友だちの「ごめんね・・」が、その子のこころに憂いを与えたのです。

　子どもたちに語ることの中に、「人は誰でも間違いをします。そのとき思いきり勇気を振り絞って『ごめんなさい』を言おうね。言えたとき、君は本物の『ひと』になれるんだ。自分のことをこころから弱い人間だと認めたとき、君の周りにいる人たちは皆、仲間なんだよ、友だちなんだよ。その時、勝ったとか負けたとかいう気持ちはどこにもないだろ、ただただ、あったかい気持ちがあるだけ・・・よかったね。」

　新しい年が始まりました。心機一転、『自分は弱い人間』宣言しましょう。どこが弱いって、それはいろいろです。
あたま → ほとんどの人がこれでしょう。　からだ → 食事や運動大切にね！　こころ → まずは笑顔でしょう。

　ちなみに栗田は女に弱い・・・

　この教室には弱いところをしっかり持って、それをしっかり認めて、それを隠そうとせず、こころをまる裸にしている人がいっぱいいます。彼らには得意技があります。

　『笑顔』です。

　笑顔ってどのようなときに作れるか？（作り笑いではありません）

　こころから安心できる人が目の前にいるときです。赤ちゃんの笑顔がズバリそれです！

　自分が弱いことをみんなに見せているから、そしてみんなも弱いところを見せてくれるから、憂いをもって接することができるのでしょう。「だいじょうぶかい、辛くないかい・・・。」

　「自分から人を傷つけることになる言葉なんか出すはずないでしょ、君のこころが『はだかんぼ』なのが見えるからさ、ほら見て、ぼくのこころもまる裸・・・。お互い弱いもの同士、助け合っていきましょう。」

　「また『勝ったの負けたの』の１年が始まるのか。」などとネガティブになっていないで、それより負けた人のこころに寄り添えるかの年にしていこうね。きっとそんな君に家族の方も気がつくし、すると不思議なんだね、家族がひとつになってゆくよ。学校ではクラスがひとつになってゆくよ。

　君ならできるよ。なぜならここへ来ているからさ。（ちょっと自慢に聞こえるかな。でも本当のこと。）

　ありがとう。